

日記文学の日常性

千葉 覚

中古・中世の仮名日記文学を読んでみると

何らかの主題をもとに、さまざまな感動・事件を回想し記しているという感が非常に強い。単なる「日波」という日々の記録でないこと

はいうまでもないが、では主題は何か、というところ、浅学非才の私にとっていつもそれは大きな謎であり、作者の志向するものは一体何なのか、曖昧模糊としてなかなか掴めない。

当然、自照性は有するがかなり主観的であり、また大胆な省略もある。とどまることのない生の連続で、繰り返される日常生活を記す記録ではないことはもちろんである。自己の印象深い感慨を（悲喜こもごも種々あるけれど）記憶に強く残っている事を回想しているのである。主題は日常を離れて記載されている非日常的感慨に注目しなければならぬのだらう。

蜻蛉日記には次のような記事がある。

心のどかに暮らす日々、はかなきこと言ひ言ひのはてに、われも人も悪しう言ひなりて、うち怨じて出づるになりぬ。

（略）あなものぐるほし、たはぶれごととこそわれは思ひしか、はかなき仲なれば、かくてやむやうもありなむかし

結婚生活も十二年目を迎えた康保三年八月の出来事である。作者とその夫兼家は些細なことから互いに相手を責め合い、はては兼家が子道綱にもう来ないと捨て科白を残して去っていった事件である。「はかなき仲」と頼りない夫婦関係が述べられているが、この日記には兼家礼弾の言葉を連らね、夫の愛を難じ、不信感を示す記事は多い。それがこの日記の主題とも深く関連する重要な事柄であろう。ここにも兼家に対する愛情・不信・疑い

の気持ち微妙に入り組んで、複雑な作者の内面が描かれていて、注目すべき箇所ではある。ところが私は更にこんな点にも注目してみる。引用の始めの部分「心のどかに暮らす日」の所である。作者の兼家とのんびりと屈託することなく過している様が窺われる。

頼りない夫婦関係、つまり非日常的感慨に主眼を置く作者にとってこれは省略してもよい表現であろうが、二人の何げない日常生活を垣間見た感じがして非常に興味を持てる。このように主題からはずれたにしても、平凡な日常性の強い表現に私は強く惹かれるのである。

印象強い感慨を回想し、年を追って記しても生は連続してあるものだからそこに日常茶飯事が隠れている。そしてその隠れて見えな

されているからこそ読者は作者の非日常的感
慨を鑑賞できるのではないだろうかなども
思われる。隠れて見えない日常性が稀に表現
されていると非常に興味を抱くのである。

紫式部が中宮彰子に出仕した記事を中心に
記されている「紫式部日記」は記録的な要素
が強く、その点異質ではあるが、中宮彰子の
若宮出産後、間もなく宮中へ戻る際の記事に
多少唐突な感じで宮仕え以前の作者の回想が
記されている。この一節も作者の出仕以前の
日常生活が記されていてこの日記の日常性を
示すものであり、他の記事とどう関わりを持
っているのか、また持っていないのか興味深
い。

純粋な仮名日記ではないが、平安末から鎌
倉初期の動乱期に生きた建礼門院右京大夫に
家集がある。その長文の詞書と、ほぼ年代配
列から日記の家集と呼ばれ、自己を回想して
まとめた仮名日記の要素を強く持っている作
品がある。「あはれにも、かなしくも、なに
となく忘れがたくおぼゆることどもの、ある
をりをり、ふと心におぼえしを思ひ出でらる
るまに、我が目ひとつに見むとて書きおく
なり」と冒頭の詞書にもみられるように印象
深い事件を回想して記したものが、その中

でも平資盛との恋が主軸になっている。その
集の後半部分に七夕の歌五十一首がまとめて
置かれている。集中、年中行事の歌がまとま
って詠まれた歌群がないのに、なぜ七夕歌だ
けが後半部分に置かれたのか、さらになぜ五
十一首なのか、(編纂時添加されたと思像で
きる最後の歌を除けば五十首となる)興味深
いが、ここにも日常性の強く窺われる描写に
注目される。七夕歌群冒頭歌の詞書に「年々、
七夕に歌をよみてまゐらせしを、思ひ出ずる
ばかり、せうせうこれも書きつく」とあり、
過去の七夕の歌をその詠作時に配置せず、こ
の部分にまとめて置くというのである。歌群
の歌の中には詠作時における個々の歌が非日
常的感慨の枠内にある印象深い作品ではなく、
七夕の日に歌人として平生変わりなく詠んだ
日常的なものもあると解釈できようか。不断
から詠作する歌人としての自負心とともにこ
の集の構成意識も窺われ、その構成意識が強
いからこそ、何らかの主題も考えられ、なか
なこの日常性を示す表現も無視できないも
のとなる。成立と深く関連した日常性といえ
る。さらに何故ここに七夕歌群があるのかを
私なりに感じたことを記しておきたい。

彦星の行合の空をながめても待つこともな

きわれぞかないしき

の歌などで糸賀きみ江氏も述べておられるよ
うに(新潮社日本古典集成「建礼門右京大夫
集」)平資盛との恋と別離を投影させた歌も
みえる。「星合は、追憶の中に生きている資
盛と自分との姿の投影」(糸賀氏前掲書)と
なると資盛との恋を主軸にしているこの集で
はその投影された歌は決して日常的な作品で
はなく、非日常的な感慨であり、当然詠作時
に置いてしかるべきものである。にもかかわ
らず、日常性の強い他の七夕の風俗を詠んだ
歌といっしょにこの後半部に置いたのはなぜ
か。それは資盛追憶の中で生きてきた作者自
身が自己の意識に対する一つのけじめを示し
たかったからであろう。もちろんこの歌群の
後にも資盛を偲ぶ描写は多少みられるが、そ
の多くは年中行事や賀宴に関連した穏やかな
歌である。何よりも七夕歌群の直後は後鳥羽
帝への再出仕の内容であることから建礼門
院に仕えた女房、そしてその縁で結ばれた資
盛との過去に一区切りをつけたかったのでは
ないだろうか。二星相合のロマンは他のどん
な歌、年中行事よりも資盛との恋を偲び、区
切りをつけるには最適であった。